
IS-インフィニット・ストラatos-知識を求めるもの

rei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS・インフィニット・ストラトス・知識を求めるもの

【Zコード】

Z8257X

【作者名】

rei

【あらすじ】

世界にはそもそも不思議であふれでいる。

この世界で何かを証拠にして説明することはそれを否定する証拠にもなりうる

この世界に”絶対はない”

プロローグ

この世界には100%と0%は存在しない

誰が言った言葉かはわからないがその言葉は俺にとって衝撃的だった

この世界にはわざわざ理論や常識がある

しかしその言葉はその理論や常識をただ受け入れていた俺にとって確実に変化をあたえた

そう

「絶対」なんてものはこの世界のどこにも存在しない

なぜならそれを定めたのもそれに縛られるのもすべて同じ人間なのだから

だから俺はあととあらゆる知識を吸収した

そして理解した

人間の定めた「絶対」を超えるにはなによりその「絶対」を知らない
ければならない

そんな生活をするようになつてから2年

俺が6歳のとき

世界の「絶対」は覆された

「IS」「白騎士事件」

その一つは今までの世界を完全に塗り替えた

俺の両親はもともと軍関係の仕事をしていた

だが「IS」の登場により立場を失い母と一緒に自殺してこの世を
去った

それについて何か思うところがないわけではなかつたがそのときの
おれは両親の死よりもあらたに現れた「IS」についての興味でい

つぱいだった

既存の理論の壁をやすやすと越えるオーバーテクノロジーの塊
ぜひともそれについて触れたいと思つた

しかし問題があつた

そう「HS」は女性にしか使えなかつたのだ

それゆえに世界は女尊男卑の社会が浸透し、いつしかそれが当たり
前となつた

「HSが使えるのは女性だけ。ゆえに女性のほうが優れている」

それについても俺は特に思つといふはなかつた

世界がその傾向にあひつとも俺には関係ないからだ

だがその常識「HSが使えるのは女性だけ」という理論が「絶対」と信じて疑わない世界は気に入らなかつた

なぜありのまま受け入れる？

なぜ信じて疑わない？

なぜ？なぜ？なぜ？

だから俺は「HS」について学んだ

開発者 篠ノ之束の論文を読み存在しつるすべての「HS」に関する本を読んだ

そしてそのかいあって12歳にして「HS一級整備士」の資格を得ることができた

至上最年少での記録に興味をしめした倉技研の勧誘を受け俺は倉技研に所属することになった

そしてそれから2年、「HS」について研究開発をしそれが認められついには倉技研のHS部門総責任者まで上り詰めた

ほんとに俺みたいな年齢のやつに任せていのいか氣になるといひだ
がいいといつている以上氣にしないことにした

そしてあるひ俺のもとに依頼が来た

「日本の代表候補生の専用機を作つてほしい」というものだつた

俺達はすぐて製作に着手した

ベースとするのは日本で今一番つかわれてゐる「打鉄」と呼ばれる
量産機

仮の名称は「打鉄」一式
それをもとて改良をすすめ専用機とするところになった

開発は順調だつた

当初の予定より高性能な期待に仕上がる予定だつた

だがそこで事件が起きた

なんと俺が「打鉄式」を起動させてしまったのだ

原因はわからない

いままでも「EIS」に触れる」とはあつたが起動させたのは初めて
だつた

「打鉄式」はすぐに「初期化」と「最適化」を完了させ俺の専用
機になつてしまつた

かくして俺は囁らすして世界の常識を覆したのだった

I.S学園入学（前書き）

作者のハートはガラスです

感想は歓迎ですがあまりきついと作者のハートが砕けてしまいます

IS学園入学

おれがISを起動させてから2ヶ月

俺はIS学園に入学していた

もちろん俺の意思ではない

俺がISを起動したのはすぐに日本政府に伝わった

それを知った日本政府は俺を保護の名目でIS学園に入学させるとともに世界に”ISを動かせる男”として宣伝するつもりらしい
しかし自体は政府の思惑通りには行かなかつた

なぜなら俺は最年少の倉技研所属のIS開発者であり簡単に異動はできなかつたからだ

俺はすでに開発者としての力は世界中の開発者の中では有名だつた

なにせ第三世代の技術といわれる”イメージインターフェース”の

開発者は俺なのだから

そんなわけで俺はIISにおいての発言権、影響力ともに政府のそれをしのいでいるのだった

そこで俺はIIS学園に入学するときに条件をいくつ出した

- 1・学園内設備施設の自由使用
- 2・有事の際の独自行動の承認
- 3・学園のIIS「打鉄」を一機譲渡する
- 4・授業中における行動への不干涉

以上4つを認めさせた

3つ目のIISの譲渡は非常に渋ったが俺の開発したIISのデータが取れるのならやむをえないとして泣く泣く認めた

かくして俺はIIS学園に入学した

「私は副担任の山田真耶です。どうか皆さん、一年間よろしくお願ひしますね」

いま教壇のとなりで話をしているのは山田麻耶

俺のクラスの副担任である

ちなみに今の先生の挨拶に対する生徒からの反応はなかった

「え？ とやうですね・・・、それでは最初のヒューマンアーティスト紹介をしてもらいましょう」

先生はまずくなった空気を振り払うためにさつ提案する

それにしてがいみんな簡単に自己紹介をしていく

俺は苗字が霧生なので五十音順でいくと最初のほうなのだが今はとくごくくりなくみんな座つたため苗字を仮にする必要はない

ちなみに俺が座つたいるのは廊下側から2列目の一一番後ろで今は窓側から紹介して言つていいので両分は回つてこない

・ それにして やはり 予想していたとは いえかなりきつい状況
だな

自分以外全員女子といつこの状況は

いや、もう一人いたな

たしか名前は「織斑 一夏」だつたよつた気がする。前に俺と一緒にテレビで扱われていたはずだ

今は一番前の席に座つている

後ろから見るとかなり挙動不審だな・・・

まあそれもしかたないな。俺は一番後ろに座つているので横からの
視線しかないがあいつは一番前。つまりは自分の全方向から女子の
視線を受けていることになる。

俺だったら・・・考えたくもない状況だな

「・・・くん、・・・くん、織斑一夏くん」

「は、はい！？」

俺がそんなことを考えているとどうやら織斑の番になつたらしい

あまりに緊張していたからなのかはわからないが上ずつた返事を返してしまつ織斑

とうぜん周りからはくすくすという笑い声が聞こえそれがさらに織斑を緊張させる

「ひやー？あ、あの・・・お、大声出しちゃって「めんなさい。お、怒ってるかな？？もしかしたら、「めんね、「めんね！？」

その織斑に対して自分が大声を出したことにたいして怒つているのではないかと聞いている山田先生。なぜか田じりには涙がたまつていて今にも泣き出しそうだった。

こんなで副担任、いやこのクラスをまとめることができるのだろうか？

俺が言うのもなんだがこのクラスは相当おかしい編成をしている

男性でありますながらE-Sを動かせた”俺”と”織斑”だけでも相当ことだがそれだけではなくこのクラスには篠ノ之東の妹がいる

せうには対暗部暗部組織”更識”の従者までいる始末

そのほかにもイギリスの代表候補生もいて相当力オスな編成になっている

個人的にはデータがとりやすくなるのでありがたい話なのだがそれをまとめなければならない立場からすれば相当頭の痛い話だろう

このクラスの担任は誰なのだろうか

もしまとめられるような人物ならその人は人間ではないな

「ほう、だれが人間ではないんだ？」

俺がそんなことを考えていると俺の後ろから突然声がかかった

そこを向くとなんとそこにはかのブリュンヒルデ”織斑 千冬”が
いた

あ～やつちやつたかな～と思つて”いる”とブリュンヒルデ”がもう一度
問うてくる

「もう一度聞こうか。だれが人間ではないんだ？」

「あ～それはあなたですよ。ブリュンヒルデ」

隠しても無駄”そ”だから俺は白状することにした。だつてなんか「
うそをついたら 殺す」みたいな雰囲気して”る”んだもん

「その名で私をよぶな。ここでは織斑先生だ」

「はあ、それでなんでここにブリュンヒルデ”なかつた織斑先生がいるん
です？」

俺が心底などに思つて”いる”と今まで黙つて”いた”俺の隣の席の生徒が
答える

「それはね～なつちやん、織斑先生が～このクラスの担任だからなのよ～」

今答えたのは先ほどでてきた対暗部暗部組織”更識”の従者である”布仏本音”である

なぜ俺が名前や立場を知つてゐるかは～」では翻覆しようと

にしてもやうか～織斑先生がこのクラスの担任か～へ～

「マジで？」

「マジなのよ～」

「せうか～～～この世界に神はない」

「どうしたの～なつちやん？」

いや、だつてさあのブリュンヒルデだよ～めつげやめんどやうじやん～～見るからにルールにつるをそうだしけんビやうだしだし厳しそうだしけんどそうだし

「なんだ？不満か？」

「無満ではないですよ。ただ面倒くなりそつて鬱だなと思つただけです」

「まう。安心しき、私は厳しいからな」

「・・・だから面倒なんぢやないですか

俺が。「こんな体勢でおつになつていると横から誰かが頭をなでてきた

「だいじょうぶだよ。なつちゃん。わたしもいるから」

「それが何の解決になるんだ?」

「え、とね、わかんない!」

「はあ・・・もういいよ」

俺達がこんな感じのやり取りをしているのを周囲は興味深そうに観察している。そんなに珍しがるようなものだろつか? 女子の考えはよくわからん

「さて、話はまとまつたな。次はお前が自己紹介しろ」

「なぜですか? まだ俺の番ではないはずでは?」

「き】するな。とこに周りがきにしきていいかげん収集がつかなくなりそうだからな・・・」

「はあ・・・まあ確かにこの状況は少々まずいですね」

今の状況を簡単に説明すると俺、いや俺と織斑先生そして本音に対する周囲の興味や嫉妬の視線がきついです!! なんで俺に対しても嫉妬の視線も飛んでくるのかはわからないが今にも爆発しそうな状況でした

なので俺は速やかに自己紹介することにした

「霧生 凪です。偶然ISを動かせたのでこの学園に条件付で入学しました。ちなみにその本音とは幼馴染です。好きなことは知識を得ることと研究、嫌いなことは面倒なことです。まあ、これからいろいろあると思いますが偶然にも一緒にクラスになつた以上仲良くなきましょ。1年間よろしくお願ひします」

俺はそういうて頭を下げた。まあ、こんな感じでいいだろ？

「さてまだ自己紹介が終わっていないようだがもうそろそろ時間がないので後のものは適当にやっておけ。ちなみに私がこのクラスの担任を務めることになつた織斑千冬だ！君たち新人を15～16の間に使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。出来ない者には、出来るまで指導してやる。逆らつてもいいが私の言うことは聞け、よかつたら返事をしろよくなくとも返事をしろ、私の言うことには返事をしろ、いいな？？」

・・・何といつまるで軍隊のような言葉であったがそこには消して見捨てないといつ確固たる自信を持つているのを感じさせる挨拶をした

これが世界最強の威儀といつやつなのだろうか？

と考えていた俺の思考は急に止まってしまった

「さやああああああ……千冬様、本物の千冬様よ……」

「ずっとファンでした……」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです……北九州から……」

「あの千冬様にじき指導いただけるなんて嬉しいです……」

「私、お姉様のためなら死ねます……」

「……なんとか予想外だつた。世界の頂点に教えてもらえるのは確かに光栄なことだがこれはいくらなんでも予想外だつた。後最後のやつ、さすがに死ぬのはどうかと思うが。もつと命は大事にしないさい

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

織斑先生はあきれたように頭を抑えてつぶやくが彼女達にはさうして火をつけたらしく

「あやああああああ……お姉様……もつと叱つて……罵つて……」

「でも時には優しくして……」

「そしてつけあがらないようになんかこままでくると句を言つ

さうしてヒートアップしていた……なんかここまでくると句を言つても無駄なような気がする。織斑先生も無駄だと悟つてのか頭を抑えているがそれ以上は何もいわなかつた

そんな感じで初日のH.R.は終わった

のだがその後俺が周りから質問攻めにされたり視線で殺されそうになつたりしたのを追憶しておこう

はあ、これから面倒になりそうだな・・・

これらの面倒見（前書き）

さて第一話ですがやはり文章などを評価してくれる人がいるのはうれしいですね

今後ともがんばるためにみなさんの応援が必要です

今後ともよろしくです

ではまた

これからの面倒見

HS学園とはその名の通りHSについて学ぶ場所だ

それゆえに倍率も高く授業のレベルもかなり高い

何が言いたいのかといふと、入学式の日も授業があるので……

「……であるからして、HSの基本的な運用は現時点では国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したHS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ……」

教壇に立つて、教科書片手に授業を行つてゐるのは山田先生
さつきのHRではかなりおどおどした様子だったが授業にならぬとの様子は消えていた

ところがなぜに副担任が授業してゐるんだ?ちなみに担任は脇で腕を組んで授業を見ていゐ

たしか副担任の仕事は担任の補佐と担任不在時の代役のはずなのだが……

さて、それはおこつておくれとしてさつきも言つた通りこの学園はレベルが高

つまるところこの学園に入れるやつはみんなそれなりにできるやつだといふことになる

そのはずなんだが……

もう一人の男である一夏の方を見てみると、教科書と山田先生を交互に見ていたら、ぱらぱらと教科書を行つたり来たりさせている

わざわざ授業には関係のないページを開いては頭をひねっている

なにをやつているんだ?

ちなみに俺はもともとが藏技研所属なためEVAについて知識としてコアに関して以外は完璧にしたある

なので織斑の拳動不審な動きをなんとなく眺めていた

「織斑くん、何かわからなー」ところがあつりますか??」

するとそんな織斑の様子に気がついた山田先生が一夏に対しても話し掛けた

織斑ははつと顔を上げてまたなにやら困惑している

「あ、えっと……」

「分からなー」とがあつたの句でも聞いてください。なんせ私は先生ですからーーー」

なぜか先生ですからを強調している山田先生

本人はそんなつもりはないんだろうがそのじぐわは正直はんそくである

なぜならそのじぐわをするとさうきれんばかりの胸が更に強調されるからである

男である以上山田が言つてしまつのは仕方のないことであるだ

と、つい柄にもなく考へてゐると突如俺の頭にシャーペンが飛来した
飛んできた方向は俺の左隣
つまりは本音からであつた

なんだと本音のほうを見るとそこには相変わらずのほほんとした笑
みでこちらを見ている本音がいた

ただいつものほほんとした笑みとは違い何か恐ろしさを持つた笑
みだつた
さすがは対暗部暗部組織の従者といつたところだらつ

「・・・せ、先生！」
「はい、織斑くん！…」

織斑はついに意を決したように山田先生に話しかけ山田先生はどん
とこいといった感じで返事をした

「ほんと全部分かりません！…」

「え・・・？？せ、全部、ですか・・・？？」

・・・おいおいそりやないだろ
さすがに山田先生も予想の斜め上の返事に困惑している

「え、えっと・・・、織斑くん以外で、今の段階でわからないつて
いう人はどれくらいいますか？？」

山田先生はクラスに対して確認を取る
もしみんなわからないのだとしたらすさまじく問題であるからである
しかし誰も手を上げない

「・・・」

それはやうだらう

ここにこむやつはみなこの程度は理解できなければいけないのだから

「お、お前はわかるのか？」

織斑が俺に聞いてくる

その時は「お前もわからないよな？」といっていた

「当たり前だらう。」の程度理解できないのならこのことか

織斑は〇△の体勢をとった
授業中なのだが・・・

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？？」

そんな状況の中さつきまで腕を組んで授業をみていた織斑先生が確
認をとる

その表情はまさかよんでもいいのか？といつ顔をしていた

まあ、でもさすがに読んでないなんじ」とは・・・

「古じ電話帳と間違えて捨てました」

・・・あつたよ。とかどうすれば電話帳と間違えるんだよ
たしかに電話帳サイズの厚みはあつたが普通表紙みて確認するだろ。
・・

「必読と書いてあつただろうが馬鹿者！－！」

織斑先生の雷が織斑に落ちる

若干哀れではあるがこれは確実に織斑が悪い
「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」
「あの厚さを一週間で…？無理だつて…」

「やれと書つてこむ」

「…・はい。やります」

そんなやり取りもありつつ一時間の授業は織斑の頭に出席簿が落ちた以外は平和に終わった

ちなみに俺はその後ずっと本を読みました

その後の休み時間に織斑がやつてきて織斑のことを「夏と呼ぶことになつたりイギリスの代表候補生、たしかオルコットとか言うのが話しかけてきたりそこでまた一夏の馬鹿さ加減が明らかになつたり

ところどころとあつたが俺には関係ないので割愛をせてもいいつ

あ、オルコットが一夏に話しかけてきた瞬間俺はめんどうだったので逃げましたがなにか？

休み時間の終わりに戻つてみると一夏が「逃げたな」的な視線を送ってきたがスルーしておいた

さて時間はすすみ居今は一時間目

HRの時間を入れるとさつきのが一時間目で今が三時間目となる

教壇にたつているのは織斑先生

そのせいいかさつきまでの時間よりもクラス内が真剣さで満ちている

「それでは」の時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する

と、授業を始めようとしたがそこで一度織斑先生は止めた

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

と切り出した

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・つまりは、まあ、クラス長だな」

「どうやらこの学園ではクラスの代表を決めなければならぬらしい

また、それなりに責任も伴つりしこ

「ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はない・・・が、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいるよ」

ふむ・・・めんどくさうだな

できればやりたくはないが」
「はー」
「学園

つまりは俺と一夏を除けばあとは生徒全員が女子

話題に事欠かない俺たちが推薦される可能性は非常に高い

まあ、俺はやらないけどね時間なくなるしめんどくさいし疲れるし
めんどくさいし

「それで誰か立候補者はいないか??推薦でも構わないぞ??」

「はいっ。織斑くんを推薦しますーーー」

案の定一夏が推薦される

「私もそれがいいと思いますーーー」

「私もーーー」

最初の発言に重ねるように一夏を代表にという意見が次々に上がる

「お、俺！？」

「では候補者は織斑一夏……ほかにはいないか？？もう一度言つが、自他推薦は問わないぞ。それと織斑。いい加減に席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか？？」

「私はなつちやんを推薦します」

「なぜに？」

一夏に押し付けられそうだと思った矢先俺の横から俺を推薦する意見が上がる

推薦したのはもちろん本音

なぜにという視線を向けると少し申し訳なさそうにしつづけをみた

おそらくはあいつの差し金か

最近まつたく連絡取つてないから怒つてるんだがつ

「はいはい、私も霧生くんに一票いれまーす」

「私も霧生くんを推薦しまーす」

またしても俺を推薦する声があがる

「候補者は霧生凪と織斑一夏。他にいなればこれで締め切るぞ」

織斑先生がそういうと一人の女子が机をたたきながら立ち上がった

「待つてくださいー納得がいきませんわー！」

立ち上がったのはさつき一夏に突つかかって言っていたイギリスの代表候補生のオルコットであった

「待ってください！！そのような選出は認められません！…大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！…わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

・・・

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！…わたくしはこのよつな島国までIS技術な修練に來てるのであつて、サーカスをする氣は毛頭ございませんわ！…」

・・・

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！…ISの知識もろくにない極東のサルや、ISも使えないくせに玩具でISに対抗しようとしている極東のサルがクラスの代表になるなんてありえませんわ！…」

・・・うぜえよこいつ

なんかマジでイラついてきた

いつもは切れたりしない俺だが今回は々々に切れそうだ

だが、落ち着け冷静になれ

「いいでほひつておけば俺は代表にならずにすむ

面倒」とに巻き込まれない

・・・よし落ち着いた

「のままこいつをおだてて押し付ける方向でこいつ

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだる。世界一 まざい料理で何年覇者だよ」

「なつ……！？」

なんか一夏が切れた

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「侮辱もなにも、先に馬鹿にしたのはそつちの方だ。違うか？」

・・・あれ？

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の手の言つよりわかりやす」

おかしいな・・・

「言つておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い、いえ、奴隸にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そうですか？ 何にせよちよつといいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたない機会ですわね！」

「ハンドゼンジのくらこつかるへ。」

「あ、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンドツけたらいいのかなーと」

「お、織斑君、それ本氣で言つてるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

クラス全体が笑う

「なに言ってんだよ、俺と戻はーじ使えるんだぜ？ やつてみなきやわかないだろ？」

なあ？ と言いたげな視線を送つてくる織斑

なんかよりいっそ、面倒な事態になつてね？

「よし、話はまとまつたな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。まずは織斑とオルコットで戦い勝つた方と霧生が戦う。それでいいな」

有無を言わせない織斑先生の言葉でしめられた

あれ？俺一言もしゃべつてないのになんか面倒」とに巻き込まれてない？

これらの回数は（後書き）

どうでしたか？

文章の文字数は少しだけ前回より多いですがそれでもまだ少し少ないですかね？

今後も精進していきます！！

初日の終了と感想（前書き）

こんな駄文を読んでくれる方がいるなんて感激の極みです

今後ともがんばっていきます

ぜひ作者のために感想などをくれぬといれしいです

でせどりつば

初日の終りと再会

「よつやくおわった・・・」

よつやくH学園初日の授業のすべて終了したのだ
背伸びをするとばきばきという音がした
一夏のほうをみると机に突つ伏している

まあ一日中最前列という位置で女子からの視線をもろに受けていた
のだから仕方ないか
それに自業自得とはいえ織斑先生に何回か出席簿アタックをくらつ
ていたからな～

てかれぜつたい出席簿でだせる音じやない気がするんだがな・・・

俺がそんな感じのことを考へていて机に突つ伏してい
た一夏が話しかけてきた

「よつやく一日終わつたな～」

「ああ、お互いお疲れ様だな」

「ああ、こしてもこれは肉体的な疲れつてよりも精神的な疲れが大
きこよつな気がするよ」

「それについては激しく同意する」

はあと男子一人今日のお互いの状況を話しながらお互い励ましあつ
ているとさつき出て行つた山田先生が戻つてきた

ちなみに今は最後の授業が終了してから2時間ほどたつてこのるので

わざとこう表現はおかしいのだが山田先生はわざまで今日の授業で一夏の知識に相当な問題を感じたよう

「先生ですか……」

といつて放課後一夏に工科について補修したいのだ
ではなぜ余裕な俺もここにいるのかといつと

「山田君はその、なんというか、少々想像が過ぎるというかなんと
いうか・・・とにかく危ない状況になることがある。お前だけが頼
りだ！」

と織斑先生に言われたため言い方は悪いが山田先生の監視のために
一緒に残っていたのである

まあ今日の授業を見る限り一人だけにすると補修ビコリではな
くなりそうだしな
無難な判断であるといえるだろ？

さて、その補修が先ほど終了したわけだが当然入学前の参考書を捨
ててしまい読んでいない一夏が簡単に理解できるはずもなく結果的
に今日一夏のどどめを山田先生にされた形になつた

この後田一夏にむかうに物理的などどめが下される斧だがここでは
割愛しよう

「ああよかつた、まだいました」

と、先ほど出て行つた山田先生がすこしきそいで戻つてきて言つた

「おー一人の部屋割が決まりましたよ」

「え??俺は確か一週間は自宅通学って言われてたんですけど??」

部屋割りが決まったという言葉に疑問を返す一夏

普通に考えればわかるだろ・・・

と若干あきれていると山田先生が

「ええ、本当はその予定だつたんですがおー一人の場合は特別なケースでしたので何とか部屋を用意したんです」

「??なんで俺らは特別なんですか??」

はあ・・・いひつ自分の立場わかつてないな

「一夏、俺らがい今言つのはどーだ?」

「え? IIS学園だろ?」

「そりだつまリは俺らはIISを動かせる。そして俺らは男。これがどういう意味を持つのかわかるだろ?」

「??」

本当にわからないといった顔をする織斑
山田先生も若干苦笑いをしている

「つまり俺らは研究者やほかの男たちから狙われる危険があるんだよ。研究者にとつてはいいモルモットだからな俺らは

「ああ、でもそんなことおこらないだろ?」

「「」の世界に絶対なんてない。可能性がある以上ここにおこっておくのが一番なのさ。納得しなくても理解はしておけよ」

俺は最後にそう一夏に告げる

一夏はわかつたようなわからぬような表情をしていた

「それで山田先生、俺らは相部屋ですか?」

そろそろ部屋に帰るうと思いつ山田先生にきく

「いえ、部屋割りの都合上お一人は別々でそれぞれ女生徒との相部屋になります」

少々気まずげにいつ山田先生

「やうですか・・・まあいいですなるようになるでしょう。で、部屋番号は?」

「えーと織斑君は1025で霧生君は1034です」

そういうながら鍵を渡す山田先生

「それとこの学園意は大浴場があるんですけどお一人はまだ使えません」

「え? 何ですか?」

おーおー一夏そんないとわからんのか?

「お前は女生徒と一緒に風呂に入りたいのかばか者」

「ばーじーー」とこの出席簿が一夏の頭に落ちる音とともに織斑先生が現れた

てか威力高いなーだって一夏伸びてるし

「お、織斑君! ? 大丈夫ですか! ?」

「霧生やつの」とは気にせず部屋に行け。荷物は今日お前が学園に送つたものを運んでおいた。」

「やうですね、やうやせてもらいます」

俺はそりそりと部屋にむかって歩き出した

「1034 いいだな」

「んこん

一応鍵を持っているが同居人が何をしているかわからない以上礼儀としてノックをして様子を見ることにした

「へ.ビ.う.だ.~」

中から返事が返ってきた

「失礼しする」

俺はそういうながら部屋に入った
部屋に入るとそこにはベッドが3つならんでいてそのうちの2つに
人がいた
おそらくは同居人だらう

「あれ？ なつちゃんだ～どうしたの～？」

「え？ 凪！？」

「何でお前らがここに？」

部屋のベッドにいた同居人は俺の幼馴染
同じクラスで隣の席の布仮本音と更識簪の一人だつた

俺はむかし両親が自殺してから更織家に少しの間やつかいになつて
いた

本音は幼稚園のころからの知り合いで幼馴染
簪はお世話になつたときに知り合い仲良くなつたことらも幼馴染で
ある

「それはこじがわたしとかんちゃんのへやだからだよ～」

俺の先ほどの問いに答える本音
簪はあまりの自体に呆然としている

「え？ え！？ 凪！？ なんで、ここに…？」

簪はよつやくわれに返るといつもの彼女からは想像もできないべりいおおきな声で言ひ

「俺も今日からここで生活するんだよ」

「わ、なんだ・・・」

「なつちゃんと一緒にか~」

「「めんな。いやかもしけ」」「そんな」となご（よ~）ー、「そ
うか」

俺が言い終わる前に言葉をさえぎる一人
いくら知つた中とはいえ同居はいやだろつと思つたが一人は若干ほ
ほを染めながら俺の言葉を否定する

「それにしても・・・なんで連絡くれなかつたの?」

簪が少し怒つたふうに聞いてくる

「忙しかつたからつてのもあるけど俺も必死だつたから。正直に言
うと周り気にする余裕なかつた。」めん・・・

俺が倉技研に配属してからは本当に忙しかつた
知識と知つていて理解していくも自分で考え作るといつのは勝手が
ちがつた

いくら俺が俗に言つ天才でもその日々はまさに多忙だつた
だから連絡したりすることに気を配れなかつた

「・・・セ、う、なんだ

「「めん・・・」

「いいよ、もう。また・・・食べたから」

「ありがとう。それと俺もうひとつ謝らなこといかなことがあるんだ」

「なに・・・?」

「簪の専用機開発を倉技研で請け負ったのは知ってるだろ?」

「うそ」

「その専用機なんだけど・・・俺にしか使えなくなつた

「・・・どういふこと?」

「俺がエラを動かしたのは知ってるだ? そのとき起させたのがその簪の専用機だつたんだ。俺が起動させてから何度コアを初期化しようとしても受け付けなくて今俺の専用機のコアとして使われてる。だから今簪の専用機は何もできないだ・・・」

「やつ・・・ひこ、いこよ

「え?」

「別にいこよ・・・私は、屁とまたこうしてあえるだけで・・うれ

「じいかひ」

「いじめん。そしてありがとひ」

「うそ……」

「それで専用機だけじ」

「うそ」

「俺が学園側から譲渡された打鉄のコアを使って俺がいじ（学園）で作ることになった」

「……いじの？」

簪はためらいがちに聞いてくる
簪は昔から我慢ばかりしているからな

「いじもなにももともとうちで作ることになつてたからね。それを俺のせいでコアまでなくしたんだから俺が一人で作るよ」

俺がそういふと簪は首を横に振りながらいつた

「一人、じゃないよ……私も手伝ひ

そう申し出ってきた

「でもこれは俺の責任だし

「いじの。手伝わせて……」

声は小さいが俺はそこに確かに確かな簪の血「」主張を感じた
これを拒むのは失礼だろー

「わかった。俺たちで最高のものを作ろー。」

「うん・・・・・」

「わたしのこと忘れてないかなー・・・・」

「「あ・・・・」

「やつぱり忘れてたんだ・・・・」

こつこつと今日

IS学園入学初日は終わった

今日一日で相当疲れたな・・・明日からの生活が思われるよ・・・

はあ・・・

追記 その夜の夕食は久しぶりに簪と本音、それといつの間にか現
れた樋無と虚と俺の5人で外食しました

外出許可申請?そんなものするわけないじゃないです
そこらへんは樋無に何とかしてもらいました

仮にも生徒会長みたいだしそこらへんは融通が利くようだつた
まあ、そのとき虚が頭を痛めていたことから手続きなどは虚に丸投
げしたんだろうが・・・

初日の終アート再会（後書き）

次の投稿は1週間後です

クラス代表決定戦（前書き）

今日は廻君の戦闘シーンはあつません
次話へのつなぎです
感想などなどよろしくお願ひします

クラス代表決定戦

あのIIS学園入学初日に俺に降つて来た面倒ごとの日がやつてきたイギリスの代表候補生が宣戦布告してから1週間その間俺は自分のIISの整備開発を簪、本音と三人でして過ごした一応完成してはいるので戦闘はできるがまだ完全に完成していないものがあった

「エナジーウイング」

俺の機体に実装している次世代飛行ユニット

その名の通りエネルギーで翼を形成して今現存しているビの技術よりも飛行能力を高めることができる
エネルギーによる形成された翼なのでそれそのもので防御することもできる

と、ここまでならただ便利な次世代の技術なのだがこれは問題を抱えていた

そう、この技術はエネルギーを翼の形に固定しなければならない理論は出来上がっているのだがまだ完成はしていないのである
飛行ユニットが出来上がらなければ普通の戦闘はできない
なのでなんとしても完成さえなればならない

なので俺は簪たちに協力してもらつた

楯無や虚も協力してくれるといったのだが生徒会所属の人間が肩入れするのはまずいということで辞退してもらつた

1週間簪たちと整備室を借りきり作業をすすめ何とか固定化まではできるようになつた
これでなんとか飛行はできる

だが、ここでまた問題が発生した

出力を上げられないのだ

出力を上げると形の固定化ができなくなり固定化されていたエネルギーが暴発し命の危険があるのだ

試験的に出力を上げたさいそれが起こり俺は危うく死に掛けた

なので今の俺の機体は最大出力を出すことができずベストな状態には程遠かった

まあ、それでも既存の第3世代型には遅れをとらないだろうが・・・

さて今俺はアリーナのモニターで一夏とオルコットの試合を見ている
今回はクラス代表決定戦という名目での一夏とオルコットの決闘の
ようなものなので俺は完全にとばっちりだろう
なのでまずは一人で試合をしてその勝者と俺が戦うという方式をと
つている

なので俺は今モニターで試合を見ているのである

試合は開始のブザーとともにオルコットが一夏に向けて射撃をした
銃の名前はスターライトというらしい

当然初心者の一夏がかわせるばずもなく被弾しいきなりシールドエネルギーを削られる

それからお互い攻防、いや一夏は交わしていただけだがを繰り返し30分ほどが経過した

一夏はシールドエネルギーを三分の一くらいまで削られいっぱいにぱいなのに対しオルコットはいまだ無傷だった

まあ相手が代表候補生というのもあるが何より機体の武装相性が圧倒的に悪い

オルコットの「ブルー・ティアーズ」は巨大な狙撃用レーザーライフル「スター・ライト Mk3」と、機体名と同名の自立誘導兵器通称4基による全方向からの遠距離射撃を可能にしてるのにに対し、一夏の「白式」の白式はなんと近接ブレードが一本だけ

これで30分も持つのはさすがとしか言ひよづがない

アリーナ内も一方的な試合内容にあきれの空気が漂っていた

俺に言わせればあのビットには問題があるよつに思える
なによりオルコットのが直接命令を出しているため攻撃パターンが
単調になりさらにはビットを操作している間は一度もスター・ライト
を打つていない

おそらくはビットの制御に手一杯で射撃ができないのだろう
そこをつけば近接ブレードしかない一夏でも何とか勝機があると思
うのだが一夏が気づくかどうかが問題だな・・・

なんせあいつはこの1週間ずっと剣道をやっていたと聞く
確かにEVAはあくまでもスーシなので悪くはない選択だが初心者が
扱い方も知らないのに動きを学んでも意味がない

さて、あいつは氣づくかね？

俺がそんならちもないと考へているとモーター内で状況が変わつた

一夏が近接ブレードでビットを切り裂いたのである
先ほどまでかわすので精一杯にみえた一夏だが今はビットの攻撃を
完璧によけ次々に切り裂いていく
どうやら癖に気がついたようだ

オルコットの操るビットは必ず人の死角となる場所からしか攻撃してこない
つまり後ろや真下にしかこないのだ
それに気づいたらしい

一夏の動きは先ほどまでは打つて変わりよくなつていた
ビットをすべて破壊しそのままオルコットに向かって突っ込んでいく
だが次の瞬間一夏は爆炎に包まれた
どうやらオルコットがミサイルを一機隠しもつていたらしい
直撃を受ければあのシールドエネルギーでは終了である
オルコットも自分の勝利を確信しているようだつた

だがまだ試合は終わつていなかつた
爆炎の中から一夏は出てきた

出てきた一夏のまどつていた機体はさつきまどとは違つていた

なにより気になつたのは先ほどまでもつていた近接ブレードである
先ほどまでは普通のものとなんら変わらない形をしていたそれは今はブリュンヒルデが使用していた近接特化ブレード「雪片」に酷似していた

・・・もし自分が本当に「雪片」なのでとしたらおそらくあれの能力は

「バリア無効化攻撃」

相手のバリアなどを無効化し攻撃する「」ことができるまさに一撃必殺の能力
ビーム兵器に対して絶対的な力を発揮するそれはまさしくオルコットの天敵になるだろう

・・・ただ本当にそうなら今の一夏が使えば

そこでブザーが鳴る

「試合終了、勝者、セシリーオルコット！」

負けるぞ？

「なんで俺負けたんだ？」

俺が一夏のピットに行くと案の上一夏は自分が負けた理由がわからぬようだった

確かにあの時一夏の攻撃はオルコットを捕らえいた
確かに決まつたはずの一撃

しかし現実には負けたのは一夏だった

俺の予想では・・・

「それはバリア無効化攻撃を使ったからだ」

織斑先生が一夏に解説したいる

一夏が負けた理由は俺が考えていた通りバリア無効化攻撃を使用したためだった

あれは確かに強力な能力だが自身のシールドエネルギーを攻撃に転用しているので相手が何もせずに自分からシールドエネルギーをけずつてしまふのだ

「こうならばその白式は欠陥機だ」

「え！？ 欠陥機！？」

自身の機体が欠陥機だという織斑先生にたいして反応する一夏

「いや、これは言い方が悪いな。そもそもT.Sは完成などしてないのだからな。お前の白式は普通のT.Sに比べてはるかに燃費が悪いということだ」

「まじかよ・・・」

織斑先生の説明に肩を落とす一夏

でも実際問題一夏の「白式」の能力は高い

おそらくは俺の“あれ”をも貫通する能力を持つてているのだからな

「まあ、そもそもお前は初心者だ。これからはT.Sを何度も展開し

なれていくだな

そつ締めくくる織斑先生

その後山田先生からあほみたいな厚さのマーカーを受け取っていたなんでも校内でのIHSの展開などに関するルールブックのようなものらしい

「さて、次は霧生の番だな。準備はできてるのか?」

俺にそつ聞いてくる織斑先生

「ええ、一応はできますよ」

「なんだ、うかない顔をしているが?」

「そりゃやつですよ。どばつちつせいでまだ完全にはできてないじつ(鋼)を使わなきゃいけないんですから」

俺はそつ返した

「まあ、データをとる機会だらうへ」

にやりとこつ表情で聞いてくる織斑先生

確かにそつなのだが面倒なことには変わりはない

「はあ・・・ではいりますよ。おこで、鋼

俺がそつこつと首から提げていた銀のネックレスが光IHSが展開される

全体が黒く間接の部分までも装甲で覆われ顔にもヘッドギアのよつなものをつけている

間接の部分はにぶい銀の色をしていてどこか鎧を思わせる

「それがお前の・・・」

「はい。俺の専用機 鋼 です」

俺はそつこつとアコーナに出て行った

絶対の防御力（前書き）

今回はじょじょ戻の戦闘シーンです

戦闘シーンの描[跡]は短い上に下手ですが、じつかんじは温かい戻で見て下さい

絶対の防御力

俺が織斑先生に返事をしてアリーナに出るとそこには先ほどの戦闘で一夏を下したオルコットが空中で待機していた

俺がアリーナに現れてのを確認したオルコットはどこか申し訳なさそうな感じで俺に話しかけてきた

「お待ちしておりましたわ、霧生さん」

教室で男子を見下して一夏に喧嘩を吹っかけた人物と同一人物とは思えないほど穏やかな口調でその態度にも俺を見下すような様子は見受けられなかつた

しいて言ひながら「戸惑い」だらつか? そんな感情が見て取れた

「どうかしましたか?」

俺が不思議そうに見ているのに気づいたのかオルコットは俺に話しかけてくる

「いや、ずいぶんと雰囲気が違つからな。驚いた」

「それは・・・すみませんでした」

オルコットは素直に謝罪する
本当に何があった?

「いや、俺 자체は特に何もいわれたりしていないから別にいい。それはそうと何かあったのか?」

俺は気になつてることをきいてみることにした

まあ、俺の予想では一夏との間に何かあったとしか考えられないが
感さえられましたわ

「そりか。やはり一夏だったか・・・」

俺は若干あきれを含んだ口調で言つ

俺は一夏とそこまで親しいわけではないがこの1週間あいつを見ていた限りでは一夏は天然のフラグメーカーの才能を持つているのだ

ひつ

あいつは無自覚に人に優しくするからな・・・

それでおちる女子は多いようだ

いつか後ろから刺されてNICE BORTにならなければいいが・
・

「ええ・・・／＼／＼／＼

オルコットの様子を見る限り間違いなくおちてているだらつ
はあ・・・

誰とどういう関係にならうとも俺はどうでもいいが少なくとも俺に
とばっちりで面倒」とが降りかかるのだけは勘弁してほしいな
具体的にいえば織斑先生の愚痴とか愚痴とか愚痴だ

「で、どうする。俺とは試合するのか?」

俺はこのままでは埒が明かなくなつたので確認することにした
このままだとこつまでたつても状況は変わらないからな・・・

「ええ、これはクラス代表を決定する試合ですので」

俺の問いにオルコットはやつ答える

「うやら試合はするらしい」

ただこのまま試合しても俺にメリットないんだがな

だつてもし俺が勝つたら俺とオルコットは1勝1敗で並んでしまつ

もしそうなつて場合さらに面倒になる可能性が高い

俺が負けてもなんかあとからそれをネタにあの生徒会長とか生徒会長とか生徒会長にいじられそなので負けるわけにも行かない

俺どつちに転んでも面倒だとこに首突つ込むよな・・・

はあ・・・

まあいい

今は試合に集中するとじよつ

「じゅ早速はじめるとするか

「やうですわね」

「とひるで、先ほどから気になつていていたのですが・・・あなたの工
うは全身装甲なんですか?」

俺の工うについて気になつたのだろう

俺の工うは広域殲滅と絶対の防御、そして指揮能力の3点を

徹底的に追及した機体である

そのため絶対防御ではなく全身を特殊な装甲で覆っている

そのため機動力は全機体の中で最低の部類に入るだろう

それを緩和するためのエナジーウイングなのだが・・・

『話はまとまつたようだな。ではこれより霧生凪対セシリア・オルコットの試合を行う。』

俺たちの話がまとまつたのをみて、個人的にはいろいろと考えているのだが、織斑先生が告げ直後試合開始のブザーが鳴った

「では、行かせてもらいますわー！」

オルコットは試合が始まると一夏のときと同じようにスタートライトを打つてきた

当然いきなりの奇襲なのでよけられないだろうと思っていたオルコットだがその予想は外れた

「じゃ～ね～」

スタートライトが打たれたその瞬間に凪はその場にはいなかつた

「ー・?・ビ・!・ー・?・

すぐさまHJのハイパーセンサーで探すが凪の姿はどこにもない

「消えた！？」

「嵐のやつビリビリつたんだよーーー？」

「・・・・・」

ピットから試合をモニターで見ていた一夏たちは突如消えた嵐に驚きの声を上げる

ちなみに今の発言は上から順に篠、一夏、織斑先生である

山田先生は驚いて声も出せずにいた

それからさりに10分が経過したがいまだに嵐の姿は捕捉できずにいた

試合開始のブザーが鳴るまでは確かに空中、それもオルコットの視界にいたはずの嵐

しかし開始と同時に姿を消し今の今まで捕捉できずにいる
これは異常な事態だった

「ああ、もうーーービリビリつたんですのーーー？」

オルコットはいらだつていた

それもそのはず

試合開始と同時に放つた射撃をかわされたのならまだしも捕捉すら

できなくなつたのだから

だがそんな状況は突如一変した

いきなりオルコットの真下から赤黒い極太のビームが発射されたのだ

突然の事態に対応できずオルコットはそのままアリーナのシールドに一番上まで吹きとばされた

「ひ、ひ、ひ・・これはいつたい？」

絶対防御では防ぎきれなかつた衝撃を受けたオルコットは自身に何が起きたのかを確かめようとさつきまで自分がいた真下を見た

「なつー。」

そこには試合開始同時に姿をけじいまのいままで捕捉できなかつた
凪がいた

嵐は試合開始と同時に鋼に搭載されている機能の一つを使用していた

「//ハーディコロマイア」

ありていに言えば周りのいろいろな景色に溶け込み自身の姿見えなくする能力である
その鋼に使用されているそれはE-Sのハイパー・センサーをもつてしても探知できないため作業の時間が必要だった嵐はすぐさまこの能力を使つた

嵐のしたかつた作業

それは”絶対守護領域”の調整だった

アリーナに出た嵐はすぐに鋼のHナジーウイングの不調に気づいていた

やはりまだ未完成ゆえにこのまま飛行しているのは危険だったのだからさすがに嵐や簪ががんばったとはいえ、やはり1週間という時間では戦闘に耐えうるレベルまでの調整はできなかつたのだ

あるじどりなるのか

匪は空をとべないのである

相手が空中にいる以上自分も飛べなければ不利

そりには癖がわかつたとはいえるの自立行動兵器はかなり厄介だった
ではどうするのか？

交わすのが困難ならば防げばいい

匪はそう考えたのである

この機体”鋼”には絶対の防御領域を展開する能力がある
しかしそんな便利なものがそう簡単に使えるはずはない

絶対守護領域を張るにはそのつど展開する範囲、時間などを逐一計算して展開する必要がある

そしてそれには戦闘する場所の環境データを打ち込む必要があった
いまでは屋外の制限されていない環境を想定して開発されていた
が今いるのはアリーナ

周りをシールドで囲まれ上にも下にも空間の制限がなされている

そのままでは「」の能力を使いつぶことができなかつたのだ

だから嵐は姿を消して今までその環境データを入力していたのである

「大丈夫かい？」

嵐は自身の攻撃をつけて吹き飛んだオルコットに声をかける

声をかけられたオルコットは困惑した様子で嵐に答えた

「ええ、なんとか……それにしてもここまでどうにいたんですね？」

当然の疑問をぶつけてくるオルコットに対して嵐は答える

「ずっとこのアリーナの地面にいたよ。さつきみに攻撃するまで俺はずっと同じ場所にいた」

「でも、ハイパーセンサーには何の反応も……！」

俺の答えに対して納得ができないのかさらに聞いてくる

「まあ、姿が見えなかつたのせいでこの能力のひとつだ。ちなみに今まで「こいつの能力の調整をしてたんだよ」

「

はあ・・・といひあなたは空を飛ばないんですね？」

疑問はとりあえずおいておいて俺が飛んでいないことに対する疑問を口にした

「まあね。今「こいつの飛行ゴーリットが不調といつか未完成でね」

「・・・そんな状態で勝負になると?」

「別に飛べないから勝てないというわけではないさ。それに俺はこの状態で君に勝つために今まで姿を消していたんだよ?」

「・・・また姿を消して奇襲するおつもりですか?」

卑怯だと言いたげな表情で聞いてくる

「まさか、そのつもりならいつって姿を現したりはしないよ。ようやく調整が終わってね。これからが本番さ」

俺はこじともなげに告げる

「そうですか。では私もここからは本気で参りますわーーー！」

そういうとオルコットは自身の機体と同名の自立行動兵器を四機射出し俺を全方向から取り囲む

「へりいなさい！！」

ビットからビームが俺に向けて発射される
タイミング的に交わしがない攻撃

しかし俺には効かなかつた

「なーー?きていないんですねーー?」

驚きの声を上げるオルコット

アリーナ内も何が起こったのかわからぬようだった

「これが俺の機体 鋼の最大の能力『絶対守護領域』」

「絶対守護領域?それは何ですか?」

オルコットが聞いてくるが俺はそれに答えるつもりはない

「教えないよ。今は試合中だ、あいての自分の手の内をさりすまつがどこにいる？」

「・・・そうでしたわね。その能力は私の攻撃を無効化するようです。ですが！－」

そういうとオルコットはビットから再度ビームを放ち自身もスタートライトを打つ
ビットとの並行使用ができるようになつたらしく

だがそんなオルコットの猛攻も風にはきかない

先ほどいっていた『絶対守護領域』により完全に防がれ、まだシールドエネルギーを減らせていなかつた

「くつ！なんて硬さですの！？」

オルコットはエネルギーが切れたビットを戻しながらそういつた

「それは光榮だね。でもいい加減疲れたから終わりにするよ」

「？？」

嵐はそうこうと自身の展開していた絶対守護領域けすと胸部にある発射腔を開いた

そこにはプリズム状に凝固させた特殊な液体金属が装填されていた

嵐はそれをオルコットのいる方向ではなくアーダーの重心に向けて発射しさらにそれを追うように高威力のビームを胸部から発射した

液体金属に向けて発射されたビームはそのまま直撃
そして次の瞬間にはビームが乱反射しそのビームがすべてオルコットに向けて襲い掛かってきた

「くつーー?」んなことがー?」

何とかかわそうとするが何せ反射の範囲が尋常ではなく逃れること
はできずにそのまま直撃

シールドエネルギーは0になつた

『そこまでー勝者・・・霧生凪ー』

こうして今回の試合は俺の勝利となつた

絶対の防御力（後書き）

感想などよろしくお願いします

主人公紹介（前書き）

今回は主人公の紹介です

ちなみに主人公の外見は急に変わることがあります

主人公紹介

主人公

霧生 凪
きりゅう なぎ

歳 15

クラス 1-1

目の色髪の色ともに黒の典型的な日本人

幼いころに両親が自殺しておりその後は更識家に厄介になっていた
両親の件については不明な件が多く本人もよくは覚えていない
そこで簪、本音と親しくなった。

倉技研に配属してからは家に帰らず倉技研に住んでいた
その間音信不通

非常に穏やかな性格で基本的に怒らない
幼少の頃より周りから疎まれてきたために本質に孤独がありそれが
世界を変えるという行動につながっている節がある

> 133840-4093 <

専用機

名前 鋼

> 133834-4093 <

凪が開発した次世代型ISで凪の心の移し身とも言える存在

もともとは「打鉄式式」で簪の専用機の予定だつたが、凪が起動してしまつたため、凪の専用機になる

その後、凪による改良が加えられ、今の「鋼」になつた

全体が黒で、間接の部分が銀色の全身装甲

第三世代のイメージインター・フォースの応用による思考トレースシステムを搭載する

絶対守護領域の展開範囲計算、拡散構造相転移砲の反射角計算などを自分でやらなければならないため、優れた状況判断力と演算処理力が重視となる機体

待機状態は銀のネックレス

武装

長距離高エネルギー砲「ハドロン砲」

両肩にそれぞれ一機ずつ砲門をもつ高威力のエネルギー砲
その名のとおりハドロンをつかつたものであり、長距離の敵であつても、問答無用で撃墜する

「拡散構造相転移砲」

胸に搭載されたプリズム状に凝固させた特殊な液体金属を追うように高威力のビームを発射することで、広範囲にビームを乱反射させ、長距離かつ広範囲の標的を一度に殲滅する兵器・拡散構造相転移砲が搭載されており、攻撃力・防御力に優れた最高クラスのスペックを獲得している。なお、拡散構造相転移砲は液体金属を用いない、点集中砲撃も可能

レールガン「クスィファイアス」

両サイドスカートに付けられた本機唯一の実弾装備
威力はほかのものに劣るが弾速が早く威力も高い

次世代試験飛行ユニット「エナジーウイング」

この機体の最大の目玉

エネルギーを使ってスラスターを動かし飛行する今までの常識を覆すもの

エネルギーそのものを羽の形に固定することで従来のものとは比べ物にならない安定性と飛行速度を誇る

また、それ自体非常に硬く自機にまとわせて防御することもできる
いまはまだ未完成であるが完成すればウイングそのものからエネルギー弾を射出することも可能になる予定

「絶対守護領域」

全方位エネルギー・シールド・絶対守護領域を機体周囲に展開し、全方位からの一斉射撃や至近距離からの自機の拡散構造相転移砲をうけてもびくともしない絶対の壁

「マルチロックオンシステム」

試験的に組み込まれたシステム

本機の全武装を同時に使用し広範囲の目標を一度に狙い打つ
それぞれの目標にたいして起動予測などをしないといけないため扱いが難しいシステム

主人公紹介（後書き）

どうでしょ'うか？

兵器を書いたことがないので鋼は完全にお絵かきになっています・・

できれば感想がほしいです

代表決定と新たな専用機（前書き）

今回は若干二つものに比べて短いです

いつも短い？すみません・・・

ではどうぞ

代表決定と新たなる専用機

代表決定戦の次の日のH.R
クラス代表の名が山田先生の口から発表された

「では、一年一組の代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がり
でいい感じですね！」

そう、俺のクラスの代表は一夏に決定したのだ
試合の結果は一夏が一敗でオルコットが一勝一敗、俺が一勝という
結果だった
ここで分かるように一夏はクラス代表になる要素はない
だが一夏が代表に選ばれたのには理由があり・・・

「先生 質問です」

一夏が手をあげて山田先生に質問する

「俺は昨日の試合に負けたのになんで俺がクラス代表なつているん
でしようか？」

「それは・・・」

山田先生が説明しようとしたのを遮るようにオルコットが説明しだす

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

なんとも偉そうに「うオルコット
だがオルコットの説明はまだ続き

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから…」

なんとも上からな」意見である

まあ、たしかに試合は一夏の負けだったが勝負は一夏の勝ちだったといえるだろう

あのときの一夏の最後の一撃は確実にオルコットをとらえていて、当たれば確実に一夏の勝ちだった

結果は一夏の自滅だったが本人は勝つた気がしなかったのだろう

まあ、それだけが理由ではないようだが・・・

「それでまあ、わたくしも大人げないまねをしてしまったと反省します・・・」一夏さん”にクラス代表をお譲りすることにしました。やはりEIS操縦者には実戦がなによりの糧。クラス代表ともなれば戦いにはこときませんもの」

と、なんともそれらしい理由を並べてはいるものの本心は訓練としようして一夏といられるからだろう

だつてさつきの言葉の中で”一夏さん”と名前で呼んでいたからな

「オルコット「セシリアとお呼びくださいですわ」セシリアのほうはわかつたけど風はどうなんだ?お前も推薦されてたしセシリアに勝つてるだろ?」

まあそう聞いてくるわな

「まあそりなんだがな。残念なことに俺の機体まだ未完成でな、無理して使つてみたがもしされで壊れたら元も子もないだろ? いつ完成するかもわからないから俺が代表になるのは無理なんだよ」

そう

俺の機体 鋼 は昨日の試合で確認したようにエナジーウイングの調整が完了していない

それに武装もまだ未完成で昨日オルコットに打つたビームも威力が足りなかつたし先制につかつたハドロン砲もエネルギー変換効率が悪く未完成である

つまるところ実戦投入はできないのである

本音を言えばめんどくさいといつこのと簪の機体の開発で忙しこうのもあるが・・・

「まあ、がんばれや一夏。俺は応援してるよ」

俺はそうこうして会話を終わらせた

なんかその後オルコットと篠ノ乃がもめて織斑先生にありがたい出席簿アタックを受けていたようだが気にしないことにした

だつて関係ないし

IS学園整備課

今そこには霧生凪、更織簪、布仏本音の三人がいた
ちなみに時間は午前の授業がやつているであろう10時である
早い話がこの三人は先ほどのH.R（簪は別のクラスである）の後そのままここにきているのである

つまりは授業をさぼつている

「本音・・・本当にいいの？今は織斑先生の時間なんじゃ・・・？」

「ん~いいんじゃない？なつかんに手伝いだし」

少々気が弱そうに聞いた水色の髪の少女が簪
それに気の抜けたような返事を返した少女が本音である

「俺は」」」で授業中に何しても干渉しないっていう条件で」」」に
きてるからいいんだよ。それに簪と本音は手伝いつてことにしてる
から大丈夫だよ」

そう答えた少年が霧生凪である

「それにしても大丈夫なの・・・? 鋼・・・」

「うーん。まあ大丈夫なんだけど武装がねーそれにえなじーウイン
グの調整もまだまだだし・・・」

「でも、武装は使つてたよー?」

「使えるには使えるけどエネルギーの変換効率がまだ完璧じゃなく
てね。このままだとすぐにガス欠だよ」

「エナジーウイング・・・のほうは?」

「それもまだ実戦は無理だねー固定化できても安定しないから安全
に飛べないんだ」

なんとも行き詰った状態である

「とつあえず今は鋼の方は置いておくとして先に簪の専用機のまつを調整しよう」と囁つ

俺がそつ切り出すと簪はおどりこたよつて聞き返す

「・・・えー・もつ・・出来てるの?」

「完成はしないけど割つてとこだね~武装全体はできてるんだけどいつもエナジーウイング使つかう」

そつ言いながら足は簪の専用機のデータを表示させる

「これが・・・私の専用機・・・」

「そつ、現存するどの機体よりもスペックが高い俺の技術の集大成。
”紅蓮”だよ」

「紅蓮・・・」

「へへ赤いんだ~かっこいよ~」

それぞれが感想を述べる

「でも・・・」いつもエナジーウイングできないんじょ・・・?
?」

当然の疑問を聞いてくる簪

それに凪は苦笑しながら答える

「まあね、でもこの機体に使つてる武装はどれもこれも新技術でね、
実戦データがないと調整ができないんだよ」

「それじゃあ使えないんじゃないの?」?

本音がもつともなことを聞いてくる

簪はじつとこっちを見ている

心なしかその視線は期待が見え隠れしている

「いや、そうでもないんだ。エナジーウイングの開発が間に合わない
場合を考え一機だけ飛行ユニットを作つておいたんだ」

そういうながら凪はまた新しいデータを表示する

「”飛翔滑走翼”これが俺の開発した新型の飛行ユニット。出力、
機動力ともにエナジーウイングには遠く及ばないが現行のどのスラ
スターよりも早いと思うよ」

凪が見せたデータに移つていたのは凪の開発した新型飛行ユニット
”飛翔滑走翼”

普通のスラスターとは違い見た目はエナジーウイングに近い形をしている

違つるのはエネルギーを固定化する方式をとつていいこと

「これがあれば紅蓮は戦闘ができるよ」

「でも・・・それなら嵐の機体にも・・・それに初期化と最適化がまだ・・・」

「やうだよ、なっちゃんの機体も使えるんじゃない?」

「まあね~でもエナジーウイングを使わないと完全にできないし、あ、それは紅蓮もなんだけどこの予備は作つてなくてね~それに鋼には絶対守護領域がある。だから別に飛べなくてもいい。でも紅蓮は鋼とは違つて高起動機体だからね~データを取る上でも戦闘できないとダメなんだよ。それと初期化と最適化はもともと完了しているから気にしなくていいよ」

「やうひ・・・嵐と戦えないのは・・・残念・・・」

「わたしもなっちゃんの戦つてるとこう見られないのは残念だよ~」

「まあ、やうひなよ。簪のデータがあればエナジーウイングの開発も進むと思う。だから頼めるかな?」

「うん・・・・・・」

嵐の言葉に簪は肯定で答える

「頼んだよ」

凪は笑いながら簪にいつ

「で、これからどうするの~？」

本音は今回ここにあつまつた理由を凪に聞く
今回ここに就業中になつまつた理由はまだ凪から知らわれていなか
つた

「ああ、そういうえばまだ話してなかつたね。今回ここにあつまつたのは簪に紅蓮を渡して最終調整をするためだよ」

「最終・・調整・・？」

「や、紅蓮にはもう飛翔滑走翼をつけてあるからあとは実線で武装
の調整をすれば紅蓮は使えるようになる」

「わかつた・・・」

「で~わたしはなにするの~」

本音は自分がここに呼ばれた理由がわからぬいらし

「本音には訓練機のラフアールで簪の模擬戦の相手をしてもらいた
い」

「わたしが~？」

本音は自分でいいのかという表情を浮かべながら凪に聞く

「紅蓮のことはまだ知られたくないからね、俺の機体はまだ出せないし、データの整理とかを俺はしないといけないからね。頼めるのは本音しかいいらないんだ」

「うん、わかつたよ、がんばるーー！」

「簪もいい？」

「もちろん・・・」

こうして三人いがいだれもいないアリーナで簪対本音の試合が行われることになった

代表決定と新たな専用機（後書き）

感想などお願いします

本当によんでもいただけなら一言でもいいので感想を書いていただけぬといれしいです

あとついでに評価も

ではでは次回もがんばった参ります

とつあえず読む前に一言

どうしてこうなった・・・?

模擬戦 簪VS本音

簪の専用機”紅蓮”

その性能実験と最終調整のために模擬戦をやることになった

相手は布仏本音

生徒会の書記にして今回の主役 更識簪 の専属従者である
本人は整備課希望なためISでの戦闘は今回が初めて・・・ではな
かつたりする

もちろん二人ともIS学園の入試において教官との戦闘の際にIS
を使っている
結果は二人とも快勝

二人は本来暗部に属する者たち
それゆえにそういうことに對しての訓練はぬかりない

というわけではなかった

理由は簡単

今回の紅蓮の開発者”霧生凪”の影響である

霧生凪、更識簫、布仏本音、この三人は幼馴染である

凪の両親が自殺し、凪が天涯孤独になってしまった時に更識家は凪を引き取った

凪の両親はもともと研究者であった

IJSの登場によりその立場を否定された一人は自殺してしまったものの腕は一級品であった

それは暗部の名家である更識家が認めるほどであった

それゆえに更識家はこの少年を引き取ったのだ

「将来必ずや大きなことをする少年である」

それが更識の意見であった

実際凪はその才能と知識への貪欲さからIJSの技術を今の第三世代に引き上げ若くして倉技研の立場ある存在へと上り詰めた

更識家の予想通りに

だが本人はそれをあまり更識家を当初快く思つてはいなかつた

自分の能力の恩恵を得たいがために行動する蠅ども

それが嵐の更識に対する最初の認識であった

しかしそこで出会ったのが「更識簪」と「布仏本音」であった
この一人は何の打算もなく自分に接してくれる

いままだそのような存在が身の回りにいなかつた嵐にとつてこの二人との出会いは幸運であった

だがそれは嵐に限つた話ではなかつた

「更識簪」はその当時姉である「更識風音」（やうしき かざね）
いまの「更識楯無」との才能の差に悩んでいた

その才能ゆえにどんどん実力をつけていく姉

そもそも簪は生まれたその時から姉とは区別されてきた

ISが生まれた世界の主流になつた時からエラの適正試験をされた

更識姉妹

あんである楯無は自分よりはるかに高いランク

それに比べて自分はきつさうの二ランク

更識家では出来のいい姉 出来の悪い妹

そのように扱われてきた

簪はヒーローアニメが好きだった

ピンチの時にはかならずかけつけて助けてくれるヒーローが好きだった

そして自分を助けてくれるヒーローを求めていた

それが引き取られてきた少年霧生凪であった

自分が一番困った気には必ずそばにいてくれる

自分が困って泣きそうな時に必ずそばにいてくれる

簪にとつて霧生凪とはまさに自分が求めていたヒーローだった

それは本音についても同じだったようだ

本音は最初は自分の主を笑顔にしてくれる存在といつ認識だった

自分にできなかつたことをやつてくれる

自分ができなこと」をたやすくやつてのける

感謝という感情は次第に憧れへとかわった

凪は誰に対してもやさしきわけではなかつた

ビシリカといえばかりなり不親切であつた

だが凪は自分に氣をつかつてくれる

やさしくしてくれる

憧れが疑問に変わつていつた

そしてある日本音は「氣づいた

凪は不親切なわけではない

諦めているのだ、と

自分を取り巻く世界にあきらめてこの

自分のやりたいことしかやらないのは誰も自分を見てくれないから

なのだと

実際凪は幼少の頃より天才であった

それゆえに孤独で

それゆえに誰も彼を理解できなかつた

凪は意識していないのかもしれないが彼が笑う時

そこに寂しさを本音は見た

だから気づいた

この男の子は心から笑えないのだと

こころで泣いているのだと

自分を見てほしいのだと

疑問は氷塊し

その心は恋に変わった

そんな一人にとつて大事な存在である凪がある日家から消えたのだ

書置きもなく

突如

二人は泣いた

時間さえも感じしないほど心が閉じてしまった

だがそんなとき姉である楯無から一人に凪の情報が入った

その時更織は凪の行方について調べていなかつた

また、そのよつね命令も出してはいなかつた

当時姉はまだ楯無をついでいなかつた

なのに凪の情報を持つてきた

そう

楯無、風音は独自の情報をかき集めてきたのだ

それこそ死に物狂いで

誰でもない

妹である簪のために

自分の持ちうる力

そのすべてを使って

それから簪は姉にたいして確執を持つことはなくなった

姉よりもたらされた情報は

”霧生凪は IIS 整備士の試験を pass した” というものだった

そこで一人は考えた

自分たちも IIS において力をつければ

また凪に会えるのではないかと

その後簪は姉との特訓により日本の代表候補生になり

本音は IIS 整備の勉強を姉である虚にならいその過程で自身も IIS

戦闘の訓練をした

二人はそうして IIS 学園に入学した

試験のときの教官はかなり実力があった

だが恋する乙女の力には勝てなかつたらしい

二人はものの5分で勝利した

つまり一人は IIS での戦闘に関してはかなり高い能力を持つてている

簪は純粹な戦闘能力

本音は IIS のそれぞれのスペック、状態を的確につく頭脳的な戦闘能力

タイプは違えども二人の能力は同学年なかでは突出していた

ゆえに凪は自身の最高傑作を簪に託したのだが

さてここまで分かつたと思うがこの勝負どつなるかわからないのだ

簪が使うのは自身の専用機”紅蓮”

本音が使うのは量産機”ラファールリバイブ”

「じゃ、そろそろ始めるけど二人とも用意はいい?」

凪がアリーナで待機している一人へ確認する
ちなみに今アリーナには関係者以外いない

・・・ちやつかり生徒会長は観客席でみているがまあ、生徒会長だからいいのだろう

「うん・・・」

「いいよ~」

二人は準備完了を告げる

「じゃこれから模擬戦はじめるよ~」

凪の言葉の直後試合開始のサイレンが鳴る

はじめに動いたのは簪

飛翔滑走翼をフルスロットルにして本音に奇襲を仕掛ける

「はあ!~」

本音を射程に入れると簪は輻射波動を拡散状態にして放射する

「ぐ・・・いきなりだねかんちゃん」

いきなりの奇襲と紅蓮の速さについていけずにもうこいつでしま
う本音

「でも、これからだよーーー！」

本音はすかさず連装ショットガンをコール

両手に持ちそれをばら撒き打ちする

狙つて打つているわけではないが両手から繰り出される弾丸の雨は
確実に紅蓮に当たる

「・・・くつ、でも・・・ー！」

本音の攻撃に対しても簪は輻射波動を拡散状態にして打ち消そうとする

「あまいよーーー！」

本音はそういうと自身が持っていたショットガンを簪に向けて投擲
する

「！？・・・なんのつもり？」

簪は本音の行動がわからなかつたが投擲されたそれは輻射波動によ
り粉碎され爆発する

「・・・これはー！」

そつ

爆発したショットガンにより視界がさえぎられる
本音はすかさず次の武装アサルトカノンをホール

視界がさえぎられているものの本音は先ほどの位置からおおよその
簪の位置を割り出し撃つ

本音の予測はあたり簪は被弾する

「・・・やるね！本音・・・」

「ふふふ～わたしだつてやればできるんだよ～

簪の言葉に対しても本音は血漫^{ザハ}に、誇りしづ^ハに答える
実際専用機を使っている簪に対しても本音が対抗できるのはすうじこ
とである

いくら慣れていないとはいえ簪の紅蓮は世界最高

それに対しても本音のほつは量産機

本来なら勝負にならないはずである

しかし実際はかなりいい勝負になつていて

「なら・・・これで～」

簪は近接用武装囮町乙型特斬刀で切りかかる

「まけないよー！」

本音も近接ブレードを展開して迎撃に移る
二人は強烈なつばぜり合いお起こす

先に離れたのは簪

凶器型特斬刀を消して輻射波動での攻撃に移りつとする

「逃がさないよー！」

本音はそれを見逃さず五五口径アサルトライフルを展開
簪ぬに向けて撃つ

突然の攻撃に対して簪は対応できない

「・・・ もや！・・・ ひ」

簪のシールドエネルギーはかなり削られる

本音はその間も武装を展開しては撃ち収納しては展開し撃つ
その間はコンマ一秒にも満たない早業

”ラピッド・スイッチ”

本音はその技術を習得していた

絶え間ない弾幕に簪は攻撃する機会がなくひたすらにかわし続ける

簪のシールドエネルギーはどんどん削られていく

試合開始から15分

すでに簪のシールドエネルギーはつきかけていた

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

シールドエネルギーだけではなく簪の体力も限界に近かつた

絶え間なく襲い掛かる弾幕の雨

それをかいくぐり続けるのは容易なことではない

「「」のままじや・・・負ける・・・」

簪は戦意を失いかけていた

嵐から専用機をもらつたにもかかわらず自分はそれを生かしきれて
いない

簪はわかつていた

自分の反応速度が紅蓮の反応速度に追いついていないこと

反応速度に体がついていけないこと

ふがいなさを感じていた

凪は自分を信じてこの機体をくれた

でも自分のせいでそれを生かせないでいる

そしていま・・・負けようとしている

いやだ・・・負けたくない！！

凪がくれたこの機体を生かせないまま負けるなんて・・・

私は・・・

負けたくない・・・！！

” 最適化完了 神経接続開始 操縦者認識完了 操縦者 更織簪 ”

簪が負けたくないと強くおもつたつときそれに答えるかのように紅蓮が最適化を完了させる

本来 IIS とは初期化、最適化を完了させることで専用機になる

だがこの紅蓮は最初からそれが終わっている

では・・・なぜ?

『あ～簪 聞こえた?』

簪が疑問に思つてこると匂の声が聞こえる

「聞こえてるよ・・・で、なに・・・?」

『やひそり最適化が終わつたと思つんだがどうかと尋つてね』

「最適化・・・? それは最初にする感じや・・・?」

匂は最初に初期化、最適化はすでにこいつでいた

ではなぜ今になつて最適化が終わつたなどとこいつのだひつか?

『あ～言葉が悪かつたね。システムがそれを簪を認識して簪用に書き換えらうかと思つんだ。 いうなり最良化。で、どう?』

「それなら・・・今」

『やつか。 やつかまでは俺を想定したものだつたからたぶん反応速度が過剰すぎたと思おうが、 それならそこが緩和されてるはずだ

』

「わかった・・・いくよ、 本音・・・」

簪は確かめるべくサ再度本音に向かつていく

「忘れられてるのかと思つてたよ～・・・」

本音は先ほどから自分が余話に出てこないめ忘れられていたのではないかと涙目であった

それでも絶え間なく弾幕を張るあたりさすがだらう

だが先ほどまでとは違い最良化がすんだ紅蓮はそれを難なくかいくぐる

「すうじい・・・機体が・・・私についてくる・・・」れなら・・・
いける！――」

簪はやつやまでとは打つて変わり攻勢に出る

先ほどまでは違いスピードも動きの切れも各段によくなつた起動を本音追いつきれない

そして・・・

「はああああ！――」

簪の右手が本音のシールドにあたり本音を吹き飛ばす

簪はそのまま輻射波導を長距離モードに変え収束させたそれを本音に向けて放つ

ふきとばされ動けなかつた本音はそれをもろにうつたる

そして本音のシールドエネルギーはつきた

『そこまで一勝者 簪!』

簪対本音の恋するおとめの対決は簪の勝利に終わった

結果

簪残りシールドエネルギー 56

かなりきわどい結果だった

本音も専用機だったら試合の結果は逆だつたかもしれない

思わぬところで本音の実力をみた貴重な試合だつた

「あれ?私の出番は?おねーさん泣いちゃうぞ?」

そういえばいましたね生徒会長

模擬戦 簡▽S本音（後書き）

はい、なんというかもうすみませんでした

なぜか書いてこむつむに本音がなんか強くなりすぎた感があります

今後どうして行きつかいま思案中です・・・

感想などあつまつたら気軽に書いて下さー

ヒロインズ紹介（前書き）

今回はヒロイン達の紹介です

原作とは違う点があるので読んでみてください

イラストも描いていますが・・・下手です

ヒロインズ紹介

この作品では原作とは違う。原作ではわからないところを勝手に作っています

変更点

ISが登場した年

今から9年前で凧が6歳の頃

原作での一夏がさらわれたとされる時期なども今後変わる予定
作者が原作を読んだことがない上にアニメも流してみていたためこういう設定になります

更識簪

> i 3 3 8 4 3 — 4 0 9 3 <

原作では姉にたいしてコンプレックスを抱えていたがその設定がない
専用機も自作していない
日本の代表候補生

布仏本音

> i 3 3 8 9 6 — 4 0 9 3 <

原作同様の設定だが若干性格が黒くなっている
笑顔での威圧が怖いです！！

更識楯無

> i 3 3 8 5 6 — 4 0 9 3 <

原作同様でロシアの代表候補生で専用機は「ミステリアスレディ」だが
機体の整備、改良を凪に一任しているため原作よりスペックが高い
原作にあつた簪との確執はなく最近は凪に好意を寄せている様子
それゆえに若干簪との間に不協和音が生じることも・・・

オリジナル専用機紹介

「紅蓮」

凪が簪のために開発した世界最高の機体
全体的に赤く間接の部分が金色の全身装甲

右手に悪魔を思わせる大きな爪状の手が付いており左右対称ではない
ISの常識を覆す存在で初期化と最適化をすでに済ませていた（と
いうより其の概念が存在していない）

一次移行、二次移行などによる機体の変化および概念が存在しない
これは凪が紅蓮のコアを書き換えたためである
最良化という独自の進化方法を持ち使つたびに操縦者に合わせたプ
ログラムに自分で書き換える

特殊なAI機構”無段階移行機能”を搭載している
操縦者との同調率が上がるほど出力が上がる

現在の稼働率30%

武装

徹甲砲撃右腕部「輻射波動」

高周波を短いサイクルで対象物に直接照射することで、膨大な熱量
を発生させて爆発・膨張等を引き起こし破壊するというかなり強力

な武装

ISにはシールドと絶対防御があるため直接的につかんだりすることはないが相手の刀剣などの武装に対し絶対的な強さを持つ輻射波動はビームのように遠距離への攻撃、ワイドレンジでの広範囲拡散攻撃、輻射波動砲弾を円盤状に収束させてカッターのように用るなどのバリエーションを持つ

本機最強の武装

「飛燕爪牙」

両肩にそれぞれ一機ずつ内蔵されている

別名スラッシュユハーケン

切断力に優れておりおもに接近にたいするカウンターなどに用いられる

近接用発展型ブレード「吼叫ノ型特斬刀」

近接用ブレードの発展型

切断力が従来のものよりも格段に強化されビームコーティングによりビームを切ることもできる

長さは従来のものよりも若干短く取り回しがしやすい

飛行ユニット「Hナジーウイング」 「飛翔滑走翼」

本来ならエナジーウイングを使うはずだったが未完成ゆえに代用として飛翔滑走翼を装備

想定より劣るものそれでも現行のどのHよりも速い

対抗戦開幕と敵襲（前書き）

今回は正直いまいちなできです・・・

それと次の更新は早くても1-2月です

作者の学校で来週に微積のテスト

30日から中間があるためテスト勉強します

気長にお待ちください

対抗戦開幕と敵襲

あのクラス代表決定戦から早一ヶ月
代表にとつてははじめての仕事「クラス対抗戦」の日がやつてきた

俺たちのクラス1-1の代表は、不運なことに代表になつてしまつ
た男 織斑一夏

代表決定戦からのこの期間
どうやらそれなりに特訓はしてきたらしい

ただ・・・正直ものになつてゐるかはかなり怪しいといえるだらう

なぜならその特訓の相手が篠ノ乃箒とセシリ亞・オルコットの二人
だからだ

この二人、一夏にほれてゐるらしく自分から特訓の相手を買って出
たらしい

それ自体はいいことだ

篠ノ乃是剣道の有段者

ISとはその特性上、操縦者には反射能力などが多く求められる
それゆえに剣道とはその反射能力、さらにいえば一夏の白式は近接
用に武器しかないとためそこで剣道は大きな力になるだらう

対してオルコットは射撃戦を得意とする”ブルーティアーズ”を専用機とする代表候補生
射撃武器使いということはそれだけその性質を理解しているということ

射撃武器に對してかわすしかない一夏はよりその特性を理解しなければならない

また、オルコットは代表候補生

一夏はISGが動かせるとはいえた完全な初心者
そういう面でもオルコットの指導は一夏のやくにたつだろう

・・・と本来なら喜ぶべき状況なのだが現実は違つた

この一人は教え方が下手すぎる

篠ノ乃是なにやら擬音だらけでわかりにくい

といふかわからない

本人は自分の感覚を伝えるだけ

とにかくそもそも篠ノ乃是ISを勘のよつたもので動かしている

つまりは何一つとして理解できていないのだ

それゆえにわかりやすく教えるなどできるはずもなかつたのだ

それに比べるとオルコットはまだわかりやすいのかもしれない

なのだが・・・」どちらもかなり問題がある

オルコットの場合は逆に理論的にISを動かしきっている
ISの理論、原理、そういうものを本当にそのままどうえ実践する

上昇、下降にしてもそれは同じで感覚的な表現、とはいえ篠ノ乃是
あまりにもあれだが、いいところまで理論的に解説してします

確かに間違つていない

一夏はISについての知識がありえないほど持つていな
確かに正しいのだが一夏に理解させるのは不可能だろう

織斑先生のせいなのかもしれないが一夏はここに入るまではISに

ついての情報は何一つ見せてもらえなかつたらしい

まあ、本人もそこまで興味はなかつたらしいが・・・

それゆえに代表候補生や専用機

そういうたこの世界においては常識といえることすら知らなかつた

・・・入学前に参考書を電話帳と間違えて捨てたのが最大の原因だが

と、そんなわけで一人の指導はあまり一夏には効果的ではないようだ

その証拠にこの前のIHSの実技授業

そのとき専用機持ちはIHSの展開、急上昇、そのまま下降し地上10センチのところでの停止について実技があつた

その実技において一夏は下降のとき見事に減速できずそのまま地面に激突

グラウンドにおおきなクレーターを形成したのだった

本人曰く「グッとする感じでやつたんだけどな・・・」などといつてたためやはり効果的ではないのだろう

え？その時俺はどうしてたのか？

もちろんこましよ授業に

鋼は調整中だったため実技には参加してなかつたけど

とまあそんな感じで一ヶ月は過ぎていった

その間に中国からの代表候補生がきたり、その代表候補生が一夏に幼馴染だつたり、それで部屋の問題が起きたりといふことあったらしいが俺は完全にスルーしておいた

自分の立てたフラグぐらい自分でなんとかしろ

ところもあるがこまちゅもこまこまとやるこじがつた

クラス対抗戦

それはつまり各クラスの代表が試合を行うというものの
そして簪もクラス代表の一人に選ばれていた

そのため簪の機体 紅蓮 の調整をしなければならなかつた

模擬戦において最良化により簪の専用機になつた紅蓮だがまだ完全
ではない

わかりやすくいえばまだ最大稼動ができるいない

紅蓮は世界最高に能力を持つ機体

それゆえにその能力に操縦者が追いつけていないのだ

だからこそ凧はISコアを部分的に書き換え最良化という過程を書
き加えた

凧はISコアの解析はできていないもののそれが何であるかは理解
できていた

ISコアとはすなわち”人工頭脳”であると凧は確信した

初期化とは前の記憶を消去しまつさらな状況にする

最適化とは人口頭脳が操縦者を認識する工程

一次移行とは人工頭脳が操縦者を認めて進化を始めたということ

つまりは教科書などで教わるように操縦者とともに進化する

実際は操縦者の思考などを読み取り自我というものを形成し、情報を集め操縦者により近づくように進化する

それゆえに一次移行をした後の機体は操縦が楽になり能力も向上する

「Sコアとはすなわち人工頭脳なのである

とはいえないぜそのようなものがあるのか

どうやって作られたのか

「アの内部の情報は何一つとしてわかつていなかつたが・・・

紅蓮は完成した機体

もつここれ以上の進化はないといつ究極の機体だった

それゆえに進化は必要ない

だから凪は進化ではなく最良化を組み込んだのだ

そつすることで紅蓮は簪の思考などをよみとりより適したシステムを構築する

そつすることで稼働率が上がり紅蓮は強くなるのだ

と、いったことをやつていたため凪自身の機体は完全に手付かずの状態だった

今俺はアリーナでクラス対抗戦を観戦している

右隣には本音、左隣にはなぜか樋無がいた

そんな両手に花な状況では当然周囲の視線を集めることで、なんか周りからかなり興味の視線やら嫉妬の視線やらを浴びてかなり俺は参っていた

・・・なによりきついのは

『そんなに・・・おねえちゃんや・・・本音が・・・いいの?』

とプライベートチャネルで話しかけてくる俺の後ろに立つる簪だった

正直これが一番きつい……

なにかいつとなきそいつになるし……

はあ……なんでこいつなるんだ

俺がそんなことを考へていてこよにクラス対抗戦が始まった

今アリーナで対峙しているのは一夏と中国の代表候補生である鳳
なにやらやり取りがあるようだが遠田のためよくわからない

「ヒーロー……あれば青竜刀か?」

「たぶんそんなんじゃないかしら? データでは双天牙月ってなつて
るわ

青竜刀を一本くつつけたような武器が鳳のHSの近接武器の様だつ
た。

明らかに重いだろあれ……なんで片手で振り回してんだ?

鳳の攻撃を一夏は必死による
実際当たつたらしゃれにならんしなにより・・・

「あれが迫つてくるのは勘弁してほしいな・・・」

「おね～さんも同感ね・・・」

「わたしも～」

「私も・・・」

その長大さ、威力・・・視覚的迫力はとんでもないものだろう
しかも捌いてもすぐに次の刃が襲いかかつてくるという波状攻撃

一夏は鳳から距離をとる

だが一夏に機体で距離をとるのはむしろ悪手なんじゃないか？

すると鳳の肩のアーマ開き、一夏が目に見えぬ力を受けて吹き飛んだ

さらに目に見えない不可視の力が一夏を地表へと叩き付ける

「あれは・・・衝撃砲か？」

「ええ、おそらくはデータにある龍砲でしょうね。空気を固めて飛
ばすから見えない上に稼動範囲に制限がないからビームでも撃てる

「一夏にとつてはかなりきついな」

一夏はなんとかそれをよけようとするが「じび」と吹き飛ばされてしまつている

たしかに見えない弾とこいつのは厄介だが……

「でも、かわす方法あるんだがな……」

「確かにね。でもそれを氣づくかしら?」

「氣づかなければ負けるだけだ」

「結構冷たいのね? おねえさん驚いわ

楯無は対して驚いた風もなくいつその際体を密着させてきたため左の本音からは腕をつなられ後ろの簪からは強烈なけりをもらつた

・・・俺悪くなくね?

そんなこんなしているうちに状況は動いた

一夏は衝撃砲の攻略法を見つけ出したらしく

衝撃砲はもつひとつとんど撃たりなくなつてきていた

だが鳳も代表候補生

衝撃砲を攻略されたとはいえ以前優位は揺るがない

すると一夏と鳳は一度空中でとまつなにやり取りをしていった

俺を含めなんだ?と思つていると突如一夏が視界から消えた

一夏は爆発的な速さで鳳に向かっていく

突然の事態に鳳が対応しようとするがそのときにはすでに一夏は鳳の懷にもぐりこみ雪片を振り上げていた

これはきまつた

誰もがそう思いおれ自身一夏の勝利を確信した

だが突如アリーナ全体を揺らす巨大な衝撃、遅れてやつてくる破壊音がアリーナに響いた

「これは・・・」

「ええ、敵襲のよつね」

「ほんとだ~」

「でも・・・なんでこのタイミングで・・・?」

狙つたとしか思えない敵の襲来に簪は疑問を覚える

「おそれらへは狙つたんだろう。今日は対抗戦だからな。データを取るなりするなりのタイミングだらう」

「私も同意見ね。で、どうするの?」

「どうあえずは様子見だな。楯無はいつでも出れるように待機しておいてくれ」

「あら? いきなり私を出すのかしら?」

楯無はいきなり自分を出すといつ風に疑問を持つ

「ああ、もしものときはお前が出るのがベストだ。それにまだ俺の機体は戦闘が困難だし敵がわからない以上紅蓮は出せない。悪いな、簪・・・」

「わかった・・・」

「うして対抗戦は思わぬ展開へ進んでいくのだった

企画農田のHIS（前書き）

なぜだらり・・・執筆している自分がいる
テスト死んだかな

アリーナは騒然としていた

クラス対抗戦の最中に突如乱入してきた全身装甲のHS
全身装甲のHSは嵐ので一度見ていたためそれ自体にはおどろかな
つた

驚いたのはそのHSの持つている異常なまでの火力だ

そのHSはアリーナのシールドを破壊して進入してきたのだ
このアリーナのシールドは嵐の鋼の拡散層転移砲を受けても破壊ま
ではいたらない強度を持っている

それゆえに驚愕したのだ

まあ、ここに驚愕もしていなければ関心もあまりなさそうな者たち
もいたが……

「それにしても全身装甲とは……なんかパクリじゃないか？俺の」
「まあまあ、そんなことは気にしちゃダメよ？」

「嵐のやつのほうが……かつこいい」

「そ～だよ～」

嵐は全身装甲の敵HSを見て愚痴りそれを回りが慰める

ちなみに上から順に、鳳、櫛無、簪、本音の順である

周りは騒然としていて教師陣が避難誘導をしている

みんな混乱状態でなかなか避難が進んでいないようだ

アリーナでは進入してきた敵ISとそこで試合をしていた一夏と鳳が戦っていた

当人たちにも避難命令が出てはいるようだがどうやらその気はないらしい

というより見た感じ敵ISに一人がロックされているらしく逃げられないのだろう

さらにいえば進入する際敵ISが破壊した遮断シールドは再展開されておりそのレベルは4

アリーナへと続く扉もロックされているらしく教師陣も進入できず

つまり一人は強制的に戦わなければならぬ状況を作られているのである

しかしこれはなにか作戦的なものを鳳は感じていた

鳳ほどの能力を持つてすれば再展開された遮断シールドを破壊することもロックすることも可能であった

一夏たちを救出することも容易であった

だが凪はそれをしなかつた

「これは・・・狙いは一夏か俺ですね」

そう、凪は今回の敵襲は一夏か自分の機体データ、戦闘データだと踏んでいた

そして今回の犯人はおそらくは・・・

「なんでそう思うのかしら？」

楯無は凪の発言に疑問を口にする
ちなみに本来ならば彼女も避難の誘導および自体の収集に動かなければならぬのだ
だが楯無はまだ凪のそばにいた

「簡単な話だよ。俺は機体のデータをどこにも提示していない。知つておるのはお前たちと倉技研の一部の人間のみ。データをほしがるのは当然でしょう。一夏はブリュンヒルデの弟、戦闘データはなんとしてもほしいだろ？」

「なるほどね、だから出ないんだ？」

楯無は納得したように言つ

「そういうことだよ。それに今回の犯人のめぼしあつてるしな」

凪はどこかあきれたような口調で言つ

その表情はなんとも微妙な表情をしていた

「誰・・・なの？」

簪はわからないようで凪に聞く

本音もわからないといった表情で凪の返事を待つている
楯無は予想がついているようだったが

「おそらく今回の犯人は 篠ノ乃束 だろ? うね」

凪は答える

「えー?」

「・・・」

簪と本音は驚いたような声を上げ楯無は無言で話の続きを促している

「だつてそういう? I Sには必ずコアが必要になる。コアの数を複製できない以上コアは非常に貴重なものだ。それを偵察用に、しかも”無人機”に使ってくるなんて正気ではないよ」

「無人機・・・?」

「それは本当なの！？」

簪は明らかに驚いたような表情で

楯無は珍しく声を荒げる

「気づいてなかつたのか？あれ、攻撃するときのモーションがミリ単位で同じだよ。生体反応もないしな」

「でもエスは人がいないと動かないはずじゃない？」

楯無は当然の疑問を口にする

そう、エスは人がいなければ動かない

それはエスにおける常識

エスはあくまでもスースであり動かすのはあくまでも人間なのだ

だから普通の人にはその発想はできないのだ

この発想が可能なのは匪のように常識を超える考えが可能な人物か

一夏のような馬鹿だけだろ？

「織斑くん！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！…すぐ
に先生たちが工事で制圧に行きます！」

プライベート・チャネルを使って山田先生は一人に対して避難の指
示を出していた
しかし一夏たちはそれに従わない

「え、 戻り止めるって…・・・織斑くん！何を言ひてるんですか！？」

山田先生はプライベートチャンネルにもかかわらず叫んでいる
どうやらかなり余裕がないらしい
「織斑くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあつた
らどうするんですか・・・つてもしもし！？もしもし！？」

「もしもし！？織斑くん聞いてます！？凰さんも！聞いてます！？

？」

「山田先生、どちらにしても無駄だ」

「無駄つて織斑先生！？」

「いいからこれを見る」

織斑先生はブック型端末の画面を数回叩き表示されていた画面を切

り替える

「遮断レベル4に設定・・・のみならず扉までロックされて・・・まさか！？」

「そうだ・・・あのIISの仕業でまず間違いない」

「織斑先生、避難に向かつた先生方も、扉のロックによつてアリーナに入ることが出来ないと・・・」

「・・・これでは避難することも救援に向かつこともできないな」

織斑先生ら教師人はすでにどうすることもできなくなつていた
本人らに任せることにしたらしい

まあ、冷静のように見える織斑先生だが内心はかなり穢やかではな
いようでコーヒーに間違えて塩を入れてしまい山田先生にからかわ
れていたが・・・

アリーナではいまだ敵IISと織斑たちとが交戦しており廻たち4人はそれを見守つていた

どうやら織斑たちはあれが無人機だということに気づいたのか動き

に迷いがくなつていた

織斑の専用機”白式”の最強攻撃方法”零落白夜”

それは人間に向けて使うときは全力で使うことはできない

なぜなら零落白夜はISの絶対防御をも無効化する
つまりは肉体にたいして直接攻撃してしまう

命を奪いかねない危険な技だ

だが、無人機なら話しは別

全力で攻撃することができる

どうやらなんとか一夏の一撃を入れるとこいつことを狙つたいのよつだ

このままなら問題なく片がつくな

凪がそう思つたとき事態は急変した

『遮断シールド解除』

「な！？」

なんと突如アリーナを覆つっていた遮断シールドが突如解除されたのだ
アリーナ内にはまだ生徒が残つている

遮断シールドのせいで突入できなかつたが逆にあちらからの攻撃や
流れ弾から生徒たちをまもる壁にもなつていた

だからこそ凪も事態を見守ることができたいた

だがその壁が解除されてしまった

「どうやら……なんとしても俺のデータがほしいらしいな」

凪はこれが篠ノ乃束だけの仕業ではないのではないかと考えた
篠ノ乃束が犯人だといった凪だが本心では違和感を感じていた
こういつては何だが篠ノ乃束はどこか自分に似た思考をしている節
があつた

それなら今回のことは疑問が浮かぶ

そり、あまりにも醜いのだ

今回のIISはあまりにもお粗末過ぎる、醜いといつてもいいほどに
使われている技術は正直わからないが動きのパターンがわかりやす
い上に応用もできていない

そう、ただ無人で”動くだけ”なのだ
コアを作れるのは篠ノ之束だけ

つまりこれを作つてのは間違いなく篠ノ之束
今回の件にかかわっているのは間違いない
だが・・・首犯は彼女ではないな
今回の犯人はおそらく・・・

「まあいわよ・・・このままだと無関係の生徒に被害ができるわ・・・

」

楯無はあせりながらいつ

「・・・凪・・・どうするの?」

「なつちゃん・・・」

簪と本音は不安そうに仄に聞く

仄はす「こころえているよつだ

（「のままだといひいろとまざいな。でも俺の機体はまだ飛行ユニットが未完成だし・・・簪をだすか？

いやだめだ。まだ簪の機体をさらすわけにはいかないし何より相手はおそらく「国企業だ。最悪技術が流用 される危険性もあるな・・・

なりどりする・」）で最善の手は・・・）

「櫛無」

なぎは考えがまとったのか櫛無を呼ぶ

「？なにかしら？」

櫛無は自分が呼ばれるとは思つていなかつたのかすこし驚いたように答える

「ひなつては仕方がない。俺の機体はまだ飛べない、だが簪の機体のデータを取らせるわけにもいかない」

「じゃあどりあるの？」

「櫛無が無人機の撃墜、俺が遮断シールドの変わりに守護領域の広域展開で生徒を守る」

「でも……それだと……」

「戻の作戦に簪は意見する

意見するところよりは純粋に戻の身を察じてい

戻の絶対守護領域は計算により成り立つ

広範囲に展開するならなおのこと

そしてその演算は当然戻の身にも負担がかかる

「だから櫛無に出てきたりつんだよ。まあならあんな無人機じとき
瞬殺できるだろ?」

「うへん、おねえさんでもできなことはあるのよへ

「わうだな、料理とかな WWW

「うへつそれはいわないでよ・・・・・

戻は櫛無の唯一の欠点を突く

「おねえちゃん!・・・・・

そんなとき急に簪が姉である櫛無を呼ぶ
「…なにかしりっ・」

急に呼ばれた櫛無は驚いたようだ

それだけ簪が声を張り上げるのは珍しいことなのだ

「おねがい・・・凪に負担をかけさせないで」

それは簪の心からの懇願であった

「お願い・・・」

「・・・わかったわ。なつちゃんの負担が最小限ですむように瞬殺していくわ!」

簪の珍しい頼みが凪のことであったことに不満がないわけではないが凪に負担をかけるのは樋無も許せるものではなかった

「じや、頼みますよ」

凪はそのまま自身の専用機 鋼 を展開する

「いくわよ、ミステリアスレディ」

それをみて樋無もヒロを展開する

本音と簪は凪の後ろで事態を見守るようだ

それは自分が今回の件にかかわらないふたりのせめてもの行動であった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8257x/>

IS-インフィニット・ストラatos-知識を求めるもの

2011年11月17日19時08分発行